



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ポリースとグレープの物語（訳及び解説）
Author(s)	福岡, 星児; Fukuoka, Seiji
Citation	スラヴ研究, 3, 101-124
Issue Date	1959
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4941
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113134.pdf



ボリースとグレープの物語

I. 研究に関する諸問題（概観）

II. 「ボリースとグレープの物語」（訳）

福 岡 星 児

I.

古代ロシアの文学作品はそれぞれ何等かの意味での謎を孕んでいる場合が多い。総じて古い時代の或る種の作品が研究者を誘う魅力の一つは、それにまつわる幾つかの解き難い謎であると言ったら言い過ぎであろうか。この謎は研究者にその解決を迫る。或る場合にはその全面的解決が不可能と思われるにも拘らず、と言うよりはそうであればある程、研究者がその謎めいた事情について逞しい推測と、そして一つの結論をさえ持つことを要求する。思うに、概括的に言って、結局それは歴史的な現在と全く繋るところのない、隔絶した古代と言うものがあり得ないからである。で、或る作品の謎について研究者（文献学者、文学史家、歴史家等々）が下す判断は、たとえそれが或る時には主観的判断に過ぎないとしても（或いは、であればなおのこと）、何よりも先ず研究者自身と彼が立ち向う作品自体にとっては勿論、その他の様々な結果において重要な意味を持つものである。

古代ロシア文学の中でもボリースとグレープの物語には特に謎めいた未解決の問題が多い。そしてそれらの問題は互いに触れ合う面が大きいので、完全に切り離してしまうわけには行かないけれども、大凡つぎの3つに大別して見るができると思う。

第1は宗教的なものである。ボリースとグレープはロシアで最初にカノナイズされた（1072年）聖者であり、その後数世紀の間ロシア人のいよいよ深い信仰の対象となった、いわば聖者中の聖者である。だがボリースとグレープは、歴史上実在の人物としては勿論、宗教的・文学的に潤色された彼等さえもなお、我々の目には殆んど聖者らしくない。恐らく彼等が何れも未だ若者であったと言う消極的な要素の他には、彼等を聖者と見做すべき理由は彼等の人物そのものの中にはない。ヴラジーミル大公の死後、キエフ国家の権力を廻る兄弟間の紛争の渦中で、兄の送った刺客に殺された単なる犠牲者に過ぎない。もともと聖職者ではなかったし、若い公であった彼等（グレープは少年である）にはまたキリスト教徒として称揚されるべき徳高い前半生があったのでもない、と言うより彼等の前半生については殆んど何も知られていないのである。彼等を聖者と考える上にその前半生は明らかに無関係であった。未だ若くして政争の犠牲となって仆れたと言う正にそのことが彼等を聖者に仕立て上げた如くである。だがそのような犠牲者は彼等が最初でもなければ、勿論最後でもない。とりわけ封建社会においては珍しい現象ではなかった。とすれば彼等が刺客に殺されたその情況、乃至はその前後の事情に何か特別なものがあったと考える他はない。しかし今日我々が知り得る限り事件そのものには、この種の他の事件に比べて特別な点があるとは思われない。従ってその事情とは事件そのものの事情ではなくて、結局のところ事件を取り巻く外的な事情、事件を見る者の側にあった独特な事情と思われる。

だが、くどいようだが、そこにもまた具体的・積極的には何物もないと言わなければならない。ただこれは今日からも充分推測されることであるが、この若い公達の暗殺については発生当時(年代記によれば 1015 年)から既に、少数の当事者以外は、幾人かの偶然の目撃者の断片的な話によって行われたことを想像する他はなく、神秘のヴェールに包まれていたらしいのである。そのことが一層人々の臆測を刺戟して、次第にボリスとグレープにまつわる一つの伝説が形成されて行ったと考えられる。そしてこの大衆によって次第に育まれ、形成された伝説の中にこそ、約半世紀を経て改めてこの二人の犠牲者を聖者とするに至った甚だロシア的な宗教性が根を卸していたのであろう。このロシア的な宗教性の本質はどう言うものであろうか。ボリスとグレープについて書かれた物語の中に反映している古代ロシア人の宗教観を分析し解釈することは一つの課題であるに違いない。¹⁾

自然発生的に形成されたボリス・グレープ伝説を利用し、その基盤の上に両聖者をいわばでっち上げた者が大衆とは別にいた筈である。後述する一研究者の実証的推測によれば、刺客を送ったという兄スヴァトポルクは実は罪を転嫁されたのであり、事件は偶発的に、そしてもう一人の兄、スヴァトポルクを仆してボリスとグレープの仇を報いたことになっているヤロスラーフに不利に展開された。ために伝説を利用してヤロスラーフが国民の眼を欺き、なおその上に自己を高める可能性が生れるまでは、この事件は隠蔽される必要があったと言うことになる。ボリスとグレープに関する宗教的な伝説が形成されるに至った契機についても、未だその謎は充分には解明されていない。従ってまた伝説の利用の仕方、つまり宗教的な要素と政治的な考慮との結びつき方の説明も完全に明らかにされているとは言い難い。しかし何れにせよボリスとグレープの物語をして古代ロシアにおける最もポピュラーな、魅力ある物語としたのは、それを利用した為政者や、為政者と共通した利益・相接する利点をこの伝説の中に見出して物語を起草した教会人であるよりは、何よりも先ず大衆がこの事件の犠牲者を対象として結晶させた、我々には如何にも不思議な宗教体験なのである。

第 2 は狭い意味におけるフィロロジカルな諸問題である。数多い諸写本のテキスト・クリティークに始まって、それらの言語的特徴の分析、他の文学的諸作品(古代ロシアや諸外国の、特にビザンチンおよびモラヴィアの)から受けたと見られる様々な影響の解明、そしてスタイルや文学ジャンルの研究等に至るまでの過程の中に、ここでその一々について触れることは勿論不可能であるが、個別的な、しかしなお少なからざる未解決の謎が横たわっている。古代ロシア文学の中でも、ボリスとグレープについて書かれたものの種類は、両聖者に対する祈禱文の類に至るまで、最も多いのであるが、特に問題となる重要な作品はつぎの 3 つである。

(1) その一つはいわゆる原初年代記に記載されている物語である。ボリスとグレープの殺害に関する部分とスヴァトポルクとヤロスラーフの闘争に関する部分との 2 つに分けられる。前者は 1015 年の記事中に含まれており、「ヴラジーミル公への賞讃」に続いて始まる。後者はラヴレンチイ年代記およびこれと同系の写本中で 1015 年から 1019 年にまたがり、ノヴゴロト第一年代記の諸写本(シノート写本を除き)では 1016 年にまとめられている。前者即ちボリスとグレー

1) そのような試みとして、G. P. Fedotov, *The Russian Religious Mind, Kievan Christianity*, Harvard Univ. Press, 1946, pp. 94-110 参照。

プの殺害に関する部分は、年代記中のその前後の記事から明瞭に区分され得る完結した物語を成しており、ノーヴゴロ！第一年代記では「ボリスとグレープの殺害について」と題され、ラヴレンチ年代記ではグレープの方の名が欠けている。イパーチ年代記では「聖なる新しき殉教者ボリスとグレープの殺害」となっている。

(2) 様々な意味において最も重要なのは作者不詳の、普通「ボリスとグレープの殺害の物語」或いは単に「ボリスとグレープの物語」と略称される殉教物語である。現在に伝わるその最も古い写本は12世紀のもの（いわゆる *Сборник XII в. Московского Большого Успенского собора* に入っている写本。但しこれが最もオリジナルに近いものかどうかはまた別問題である）で、「聖なる殉教者ボリスとグレープの物語と受難と賞讃」（*Сказание и страсть и похвала святыю мученику Бориса и Глеба*）と題されている。以下 C. と略記する。現在までに172の写本が知られているが、単一の作品でこのように多数の写本が伝わっている例は他にはなく、如何に C. がポピュラーなものであったかを示しているわけである。しかしこれら写本の何れにも C. の作者と著作年代とを直接かつ明確に示すような記述は見出されない。従って間接的な手懸りによって作者と著作年代とを明らかにすることが多くの研究者によって試みられてきた。

著作年代については、ヴラジミールの死後間もなく起った事件についての物語であること、他方12世紀の写本が伝わっていることから、11世紀の初め（10年代後半）から12世紀の終りまでの間に書かれたものであることは確かである。しかしこの前後約200年間の枠の中で、C. の発見（マカーリイ Макарий が1849年に16世紀の写本を公刊した）後間もなく提唱されたマカーリイ自身の11世紀20年代説も、ブトコフ П. Г. Бутков の12世紀後半説も推論の根拠は薄弱で、諸研究者の考える枠は既に早くから大体11世紀後半から12世紀前半の約100年間に絞られ、大別して11世紀後半説と12世紀前半説とが行われていたのであった。今世紀に入ってからブゴスラフスキイ С. А. Бугославский (=Buhoslavs'kyj) の主張したヤロスラーフの晩年、即ち1050年代初頭説には殆んど支持者がなく、現在行われている論争の枠は更に11世紀末—12世紀初頭に狭められてきている。

著者については修道僧ヤーコフ Иаков-мних 説が長く行われて半ば定説化し、これに疑義を抱く研究者も C. を呼ぶのに「修道僧ヤーコフに帰せられるボリスとグレープの物語」等の如く称するのが例となっていた。このヤーコフ説はマカーリイが最初に C. を発見した時の、C. と他に2つの作品を収めた写本集の構成にかなり有力と思われる根拠を見出したものであり、これを支持する研究者は少なかった。だが修道僧ヤーコフとは如何なる人物かと言えば、同じ名前でも C. の作者として想定することが不可能ではない聖職者が3人あるために、これがまた論議の対象となったのである。結局「原初年代記」1074年に見える、聖フェオドーシイによって自らの後継者に指名され、しかしペチェールスキ修道院の僧団に容れられなかったヤーコフが最も有力な人物と見做されていた。一般に現在では、この写本集の中に見出された根拠の信憑性は疑わしいものとされているが、さりとてこれに対する積極的な、完全な否定材料もないようである。

C. の諸写本に関するテキスト・クリティークの段階は、今世紀の初めに行われたブゴスラフスキイの綿密・精力的な労作によって最早一応は終わったと見るべきであろうか。この種の基本的な仕事に決定的な、何か大きな結論を期待することは間違いであろうと思うが、一研究者のブゴスラフスキイ評によれば、「しかし総じて数多いテキストを分析する仕事そのものも比較的僅かな成果をしかもたらさなかった。」¹⁾ C. の数多い写本（テキストそのものの異同は非常に少ないと言われる）

1) Н. Н. Воронин, «Анонимное» сказание о Борисе и Глебе.—Труды отдела древнерусской литературы Ин-та литературы АН СССР, т. XIII, М.-Л., 1957, стр. 14.

はその構成によってつぎの 3 種類に分類することができる。

(a) ボリースとグレープの殺害の物語の他に、ヴィシュゴロトにおける埋葬の消息と両聖者に対する讃辞を含むもの。

(b) 更にボリースとグレープが死後に行った 3 つの奇蹟（「第 1 の跛者についての奇蹟」、「第 2 の盲者についての奇蹟」、「第 3 の跛者についての奇蹟」）とヤロスラーフによる両聖者の祭日（7 月 24 日）の制定、およびヤロスラーフの死について述べているもの。

(c) 更に加えて 1072 年（5 月 2 日）イジャスラーフ・ヤロスラーヴィチの主唱によって行われたボリースとグレープの聖体の遷移、新しい祭日（5 月 20 日）の制定とその後の新たな奇蹟（「跛っこで啞の乞食についての奇蹟」、「手の萎えた女についての奇蹟」、「盲の男についての奇蹟」、スヴァトポルク・イジャスラーヴィチによって幽閉された「囚人釈放の奇蹟」）および写本によっては 1115 年（5 月 2 日）ヴラジーミル・モノマフとオレク・スヴァトスラーヴィチ等が行った 2 回目（ヤロスラーフによる遷移？ を加えれば 3 回目）の聖体の遷移にまで言及しているもの。

この中で内容的に最も短かい (a) の種類の写本が原本の構成を伝えるものであり、(b) (c) の種類の写本のみに含まれている内容は後から付け加えられたものであろうと考えられる（ブゴスラフスキイその他）が、しかしこれには異論も多い（シャフマトフ A. A. Шахматов その他）。奇蹟に関する物語には通常「キリストのための聖なる殉教者ロマンとダヴィドの奇蹟の物語」（Сказание чудесь святою стратотерьпицу христову Романа и Давида。ロマンとダヴィドはそれぞれボリースとグレープの洗礼名）と言う題が附されており、普通「奇蹟の物語」として総称されているが、これを同一の作者によって成ったものとし、本来独立した別個のものとは認めない研究者も多いのである。しかしまたこれとは反対に、原本の構成は (a) の写本よりももっと短かかった、即ち物語の終結部を成している両聖者への讃辞はボリースとグレープの殺害の物語に後から附加されたものであると推測する研究者もある。¹⁾ 原本の構成に関する問題は C. の場合その著作年代（これに比して作者が誰であるかと言うことはむしろ副次的な問題である）を決定する上に直接極めて重要な意味を持っているのである。

(3) ネストル Нестор Летописец (?) の「祝福された殉教者ボリースとグレープの生涯と殺害についての講話」（Чтение о житии и о погублении блаженную стратотерьпицу Бориса и Глеба）。以下 Ч. と略記する。約 30 の写本が伝わり、その最も古い 14 世紀の写本の一つが 1859 年ボジャンスキイ О. М. Бодянский によって初めて公刊された。ビザンチンの伝統的な聖者伝のスタイルを踏襲した作品である。著作年代についてはやはり最終的な結論がないが、研究者によって考えられているのは 11 世紀の 80 年代から 12 世紀初頭である。即ち限定されてきた著作年代の枠そのものは C. の場合と同じである。

Ч. は聖者伝の定型に従って、その構成、内容を年代記に含まれている物語や C. と著しく異にしている。但しボリースとグレープの殺害に関する状況や事実、部分的な二、三の相違を除けば、概ね同様である、ただし C. に比して簡略である。Ч. は冒頭の祈りに続いて、先ず天地の創造、人類の原罪、神の恩寵とキリストの生誕、贖罪から筆を起し、ヴラジーミルの改宗に及ぶ。ついで幼いボリースが書物、殊に聖者伝や殉教者伝を読むことを好み、自らもそのような生涯を送り得るように神に祈ったこと、グレープが常に離れず兄の傍らにあって耳を傾けていたこと、やがてボリースがただ父の命に従うために結婚したこと等、年代記の物語や C. にはない両聖者の幼少年時代についての叙述が、聖書その他からの引用を交えつつ行われる。しかしこれらは勿論聖者伝

1) D. Čiževsky, On the Question of Genres in Old Russian Literature, Harvard Slavic Studies, II, 1954, p. 110.

ボリースとグレープの物語

の形式が要求した虚構に過ぎない。ヴラジーミルの葬式についてのデテールはなく、ボリースの嘆きの代りには祈禱の文句が唱えられ、スヴァトポルクとヴィシュゴロトの貴士達との陰謀の場面もなく、ただカインとの比較が行われるのみである。ヤロスラーフとスヴァトポルクとの「アリタ河の戦い」は行われない。総じて抽象的・教訓的な要素はより強く、物語的リアリティにはより乏しい。具体的な人名や地名を挙げることを故意に避けて、必要な場合にも往々別の言葉で置き換えている(ペチェネークを単に敵と呼ぶ等)。物語のテンポは坦々として、ドラマチックな場面や感情の高潮は殆んどみられない。しかし Ч. の文学的作品としての価値判断とは別に、何よりもまず注意しなければならないのは、恐らくこのようにしてネストルは彼のボリースとグレープの聖者伝を広くロシア以外のキリスト教諸国において読まれるのに相応しいものにしようとしたのであると言うこと、そしてまた事実そのような効果を収めたと考えられることである。

(Ч. の聖者伝と言う文学ジャンルに対して、С. はその一変形と見做すべきか、それとも一応別のジャンルに属するものと考えべきか、これについても研究者の見解は一致していない。С. は古代ロシア文学の独特のジャンルとなったいわゆる公の「伝」*княжеские жития* の嚆矢と考えられ、それらの中の或るものには大きな影響を与えている。)

つぎに問題となるのは、ボリースとグレープについての伝説と史実の相半ばした殆んど同一の素材を、それぞれ異った角度から扱ったこれら3つの作品の相互の関係である。これらの作品が互いに独立して無関係に書かれたと言うことは先ずあり得ない。年代記の物語と С. との関係は特に密接であって随処に表現の完全な一致、或いは平行が見られる。と言うよりは、若し年代記の物語が С. を基にして書かれたとすれば、年代記の物語は年代記作者が С. から不必要と思われる文学的潤色や С. の大きな部分を占めるボリースとグレープの独白・祈り等を除いて得た簡潔な年代記的物語を、大部分は1015年にまとめ、他は然るべき年次に分けて配したのであり、また若し С. が年代記の記事を基にして書かれたとすれば、С. の作者は逆の仕方でこれを拡大したのであると考えるより他はないのである。一致或いは平行した表現は Ч. についても見出されるが、それを別にしても既にボリースとグレープの殺害の、のみならず更に奇蹟の物語(Ч. と С. における)の平行的構成は、疑いもなく С. 或いは年代記の物語に対する Ч. の或る密接な関係を示している。

3つの作品の中何れが他に対してより基本的な、原型としての位置を占めるものであるか、時間的に何れが最初に書かれたのか。ここから、一見左程には見えないが、3つの作品の相互関係の在り方について考え得る様々な可能性、またその他にボリースとグレープの事件に関する原素材——文字化されぬ伝説乃至考え得る何等かの記録文献——の設定、この原素材に対するこれらの作品の関係等、かなり複雑な問題が起ってくるのである。勿論問題は単にこれらのものの様々な順列・組合せの可能性にあるのではなく、唯一可能な場合の究明にあるのであるが、しかしこれまでこの問題について研究者達が試みた説明や主張は殆んど何れも我々を途方に暮れさせる程互いに喰い違ったもの、真向うから対立するものである。

今世紀の初めシャーフマトフとブゴスラフスキイとによって提起された2つの基本的見解は、今日もなおこの問題を研究するに当ってその出発点となっているが、全く対蹠的なものであった。シャーフマトフの見解は1908年および1916年に公けにされた年代記に関する有名な研究の中で述べられ、ブゴスラフスキイの見解は1914年から1940年に至

る間に何回か表明された(彼の見解は終始殆んど変らなかった)のであるが、極く簡単に両者の結論のみを挙げればつぎのようである。

シャーフマトフ——Ч. は 1081 年～1088 年の間に書かれ、(彼の術語を用いる他ないが) древнейший летописный свод と новгородские записи とに基いている。С. («奇蹟の物語」を含む)は 1115 年以後に書かれ、начальный свод と Ч. とに基いている。(即ち、Ч. も С. もそれぞれ年代記を典拠としている。)しかしブゴスラフスキイのテキスト・クリティークが行われた後、最後の Ч. から直接 С. への影響関係があったとする見解は、そのような可能性が全くないとは言えないと保留しつつ、一応撤回した。しかし著作年代はやはり Ч. が先であり、С. と Ч. の近似的関係はそれぞれが別個に依拠した、年代記以外の、或る共通の出典＝「原物語」(первоначальный вид или основное ядро сказания. 一方年代記もまたそれを利用したと述べ、3 つの作品の共通の一出典としても想定した)によるものとした。(ここには触れなかったが、С. と Ч. の関係についてのシャーフマトフの意見には初めから矛盾した点がある。)

ブゴスラフスキイ——С. («奇蹟の物語」を含まない)は 1050 年代初期に書かれ(この説には、前述のように、支持者がない)、年代記(イパーチイ本およびフレーブニコフ本の原型に近い)の記事のみに基き、多少の取捨を加えた後、修辭的・聖者伝的要素によってこれを拡大したものである。「奇蹟の物語」は 3 人の作者によって書かれ、第 1 の作者は 1089 年～1105 年の間に著作し、С. の「本文」にも手を加え、第 2 の作者は 1108 年頃後半の奇蹟を付け加え、第 3 の作者は 1118 年以前に 1115 年の聖体の遷移について記した。Ч. は С. 以後の作品であり、1115 年以前(恐らく 1108 年頃)に書かれ、第 2 の作者までの С. に基いている(1115 年の聖体の遷移についてネストルは触れていないから)。

これらの問題、即ち 3 つの作品の相関々係——これが第 3 の、最も大きな未解決の謎であるが——は、先に述べたような「狭い意味における」フィロロジカルな研究・操作——それらは勿論重要であるが——のみによって解決することは困難であろう。そればかりでなく、そのようなフィロロジカルな領域に横たわっていると思われるような、個別的な謎の中には、これらの作品の相関々係の解明によって初めて説明されるべき性質のものも多いのである。

ところでこれらの作品の著作年代であるが、当然のことながら可能な限りそれぞれの作品自身が持つ間接的なデータから出発するとしても、しかしこの場合 3 つの作品——その中 С. と Ч. は殆んど同じ頃に書かれたと推定されているが、——を比較検討することによって初めて具体的な決定の可能性が得られる。作品の著作年代を決定すると言うことは、その作品を、背後にあってその作品を生む母胎となった社会の歴史的一時期と結びつけ、特定の歴史的情況に置いて考えることであり、結びつけ方の如何によってはその作品の思想内容や書かれた目的の解釈は大きく変り得る。こう言ったケースは特に古代ロシア文学において起り勝ちなことだが、僅かの年代的なずれが往々重大な解釈のずれに発展する結果ともなる。それが孤立した作品ではなく、その相関々係が問題になるような今の場合には、順列・組合せのプロスペクトが一変してしまうために、そこに単なるずれ以上のものが生じるであろうことは明らかである。これらの作品の著作年代は、このような意味において、作品の間にある相関々係によって具体的に決定する可能性が得られるばかりでなく、正に 3 つの作品の相関々係において解明されるべき問題であると言えよう。

3つの作品の相互の関係の問題が持つ重要性は、単に文学的作品としてのこれらの作品にかかわるものではない。これらの作品は、同じく宗教的・文学的な、他のジャンルの幾つかの作品とともに、歴史的資料に比較的乏しい古代ロシアの場合には特に欠くことのできない歴史的文献である。一般にこのような場合、それは勿論必ずしも作品に含まれている往々疑わしい史実のためであるよりも、主としてそれらの作品の持っている社会・政治評論的な意図の面が重要だからである。しかし同時に、極めて疑わしい史実であるとしても、その疑わしさが間接的に、かつ非常に不安定にしか推測し得ない事件に関係している場合、即ち他にその事件に関する直接の資料が無い場合には、その作品の資料的価値は当然「高い」わけである。のみならず一方においてはまた、むしろそこに述べられた事件の性質が疑わしければ疑わしい程、そのような作品の存在そのものが解釈されるべき、確かな一つの「歴史的事実」であるに違いない。このような意味を担った作品が1つならず3つまで書かれているのがポリースとグレープの物語である。更に解釈すべき「歴史的事実」は事件の物語そのものにあるだけではなく、上述のC.の写本の簡単な分類にも伺えるように、ポリースとグレープのカノニゼーションとそれ以後再三にわたって行われた遺体の遷移に至るまで、それらの企図と行動とを促した古代ロシア史の幾つかの重要なモメントの解釈に連っている。それ故これら3つの作品の相互関係の究明は、文学的作品の問題の枠を起えて、古代ロシア史の一頁の組成に直接参加するものでさえある。

ポリースとグレープの物語の研究において、C.と年代記の物語とそしてЧ.の相互関係の問題は結局その中心的な、最も重要な課題であり、その全面的解決は、より広汎な視野において、即ちキエフ国家の歴史的発展過程の展望のもとに、そしてその歴史的過程との緊密な結びつきにおいてなされるのでなければ困難であろう。そしてこれらの作品の研究と様々な臆測が、間歇的な活潑さを見せながら既に1世紀以上にわたって続けられながら、未だに最後の結論と見られるべきものが全然出ていないのも、逆に言えばこれらの作品の成立の背景にある古代ロシア史そのものの解き難さ（少くとも現在までの段階における）によるものであると言えよう。

最近再びこの問題について野心的な3つの論文が発表された。以下にそれぞれ簡単に概括するように、研究の方法も結論も驚くに足る程互いに異ったものである。

先ず最も注目し得るのはイリインの研究（Н. Н. Ильин, *Летописная статья 6523 года и ее источник, Опыт анализа*, АН СССР, Москва, 1957, 210 стр.）である。ライト・モチーフとしてシャーフマトフの基本的見解の検討およびそれに対する反論の形をとっているが、内容的には自由な、広いスケールを持った独創的な労作で、実証的であり説得力も強い。彼の直接の課題は表題が示しているように年代記1015年の物語の典拠¹⁾を明らかにすることにあるが、この典拠とは彼によればC.に他ならない。従って彼の研究はC.と年代記との関係に関するものであって、Ч.および「奇蹟の物語」は幾つかの資料の中の一つとして研究の対象になっている。

イリインは先ず930年代にモラヴィアで書かれたいわゆる「聖ヴァーツラフ伝」および完全な姿で今日に伝わっていないが、それより少し先920年代の末に書かれたと見られる「聖ルドゥミラ伝」とC.および年代記の物語を比較する。そして明らかにこれらの聖者伝

から C. が藉りたと思われる部分(幾つかの重要なプロット, エピソードおよびデテール)を見出し, それらが C. とともに年代記の物語に反復されている同じ部分に比べて「ヴァーツラフ伝」をよりよく反映していることから, C. は年代記の物語に先行したと考える. これが出発点で, C. および年代記の物語からこれらの藉り物の, 即ち明らかに史実でない部分を引き去ったものを, つぎに更めて間接的に利用し得るあらゆる歴史的文献・資料(と言っても多くはなく, 年代記の諸写本中の C. に述べられていない諸事実を初め, ポーランドの諸年代記, Thietmari Chronicon, Eymundar Saga, Ч. その他)を用いて検証する. 100 頁にわたるこの綿密, 複雑な作業が, 彼の研究のいわばヤマ場であるが, ここで彼は, このような方法によって, 先ず C. を離れ, 従来の先入主を離れて, 1015 年前後数年間の歴史を再構成しつつ, ボリースとグレープの「歴史的伝説」の実体を掴もうとするのである. その結果歴史の再構成の点では主として「原初年代記」の伝えるヤロスラーフとスヴァトポルクとの闘争の経過に対して加えられるべき多くの訂正, 「伝説」については, 先にも触れたが, ボリースを殺したのは(1015 年ではなくて, 恐らく 1018 年)スヴァトポルクの送った刺客ではなく, ヤロスラーフの傭兵のヴァリャーク達で, しかもヤロスラーフの命令ではなく, 早合点のための失策であったらしいこと等, その他幾つかの重大な推定が得られる. 但しこれらの推定自体は, 実証的で説得力を持っているが, 彼の研究の目的ではなく, 結論としては提出されていない. イリインの研究は更に C. を年代記に編入した際の年代記作者による C. の材料の取捨, 配分の仕方の跡づけにも及んでいるが, その他彼の到達した結論の中から拾うと: C. は最も早く 1070 年代の初め, 1072 年 5 月に行われた両聖者のカノニゼーションのために, これに先立って書かれ, 断片的な, かつ互いに矛盾して模糊たるボリース・グレープ伝説を蒐めて, それを最初に文字化した(多分に「ヴァーツラフ伝」に倣って)ものであり,¹⁾ 著者はイジャスラーフ・ヤロスラーヴィチの利益を擁護する立場にあり, ペチュールスキ修道院の人間(断言的にはないが恐らくヤコフ, 何れにしてもフェオドーシイの校訂を経ていると思われる)である. しかしこの原本は既に 1072 年に部分的な変改・補足と最初の 3 つの奇蹟およびヤロスラーフに関する記述を含む「奇蹟の物語」を付け加える必要に迫られた. この奇蹟の出典は, シャーフマトフも推定したように, ヴィシュゴロトの教会に行われていた「覚え書」(записи)であり, Ч. もまた奇蹟の物語についてはそれに拠っている. Ч. は 11 世紀末乃至 12 世紀初頭に書かれ, 両聖者のカノニゼーションに関する限り, C. が或いは主としてロシア教会内の要求に基いたものであったのに対して, Ч. は更めてコンスタンチノープルの総主教府の承認を得るためであり,²⁾ 既にヤロスラーフ時代に両聖者が「囚人釈放

1) C. が他の何らかの文献に基いたものではなく, 従って最も早く, 少なくとも 1072 年以前に書かれ, 年代記の物語も Ч. も C. を典拠としていると言う説は, 勿論イリインが初めて述べたわけではない. イリインの特色は年代記のボリースとグレープの殺害の物語が専ら C. のみに拠るものであると断定した点にある.

2) この点についてはなお議論の余地が残るように思われる(府主教ゲオルギイの承認を得た後にも再び更めて Ч. を起草しなければならなかったかどうか). チジェフスキは Ч. の対象はコンスタンチノープルではなく, チェヒヤだったであろうと述べている. なお彼も Ч. は C. の後に書かれ, C. に負うものであると考えているが, これらの推測に対する彼の論証は未だ行われていないようである. (Čiževsky, op. cit., p. 109 Note 6, p. 110)

の奇蹟等を行ったとする C. と矛盾した記述も、この目的に副ってネストルが「遠い過去」に転置したと考えられる。

イリインの結論は、C. の著作年代および年代記の物語に対する関係を除いて、大体ブゴスラフスキイのテキスト・クリティークの結果を支持していることになる。

つぎにヴォローニンの論文 (103 頁の註参照. „Анонимное” сказание о Борисе и Глебе, его время, стиль и автор, ТОДР, XIII, 1957, стр. 11-56) はおおむねシャーフマトフ説に立脚している。但し「奇蹟の物語」全部を含めて C. は終始一貫 1 人の作者の手に成ったものであり、その作者とは「原初年代記」1072, 1088, 1105, 1115, 1117 各年の記述にその名の見えている主教ラーザリ (Лазарь) である、と言う新説の証明に最大の熱意を傾けている。しかしその出発点となっている「手の萎えた女についての奇蹟」に登場するラーザリが他ならぬ作者であると言うことが、決して実証されたとは言えないのに、更に「囚人釈放の奇蹟」から「奇蹟の物語」全体を、そして結局 C. 全体をつぎつぎに同一作者に帰して行く過程には、多分に恣意的な強引さが感じられる。論者のラーザリ説が不可能ではないと思われるのは「奇蹟の物語」までで、終始専ら C. と Ч. との比較に訴え、両作者の世界観の相違を予め主観的・概念的に引かれた歴史的図式に結びつけて規定して行く方法自体にも疑問がある。ためにそれらの中には往々穿ったものがあるにせよ思いつきの羅列と言う印象をさえ与える。C. は 1115 年 5 月 2 日から 1117 年 9 月 6 日 (ラーザリの死んだ日) の間に書かれ、2 つの論拠 (стр. 37, 47) から未完に終わったとしている。同様に年代記の物語に対する関係 (ここでは特に問題になっていないが) も、シャーフマトフ説が正しいとしている。Ч. は C. よりも先に書かれたことが力説されるが、そのこと (先に書かれたこと) に比べれば Ч. の著作年代自体は重要な問題ではないとして、シャーフマトフ説 (1080 年代) とブゴスラフスキイ説 (1108 年頃) の両方の可能性を保留する。しかしその論旨からすれば、彼は当然 Ч. の著作年代をより古い時代 (少くとも 11 世紀中) に求めたいのであって、事実そのような「希望的観測」を洩らしている (стр. 49)。あらゆる面でイリインとは全くかけ離れたヴォローニンの所説は、要するに彼がヴラジーミル・モノマーフの時代の歴史的状況を「奇蹟の物語」のみならず、C. 全体の背後に拡大して設定したことに胚胎しているのであるが、その拡大の仕方が非実証的、観念的である。

最後にこれも注目すべき研究としてミュラー (L. Müller) の、再び新たに伝統的なフィロロジカルな方法を押し進めた綿密・着実な分析がある。イリインが歴史家であるのに対して、ミュラーは自ら言っているように Literarkritiker であり、両者が期せずして着目した幾つかの共通の論点における解釈と推論の相違は、そのまま方法論の相違を反映するものとして興味深い。彼の最初の論文 (Studien zur altrussischen Legende der Heiligen Boris und Gleb, Zeitschrift für slavische Philologie, XXIII, Heidelberg, 1954, S. 60-77) は「囚人釈放の奇蹟」に基いて C. と Ч. の関係を明らかにしようと試みたものであり、この「奇蹟」における Ч. と C. のかなり密接な類似は両者の共属的關係を示しているが、しかし積極的に影響の仕方まで示し得るものではないとし、C. の叙述に統一性のないことを検証した後、Ч. は C. のカオスを整理して得られたとは考え難く、むしろ逆の場合もあり得るとする。しかしここで、C. と Ч. とを関係づける第 3 乃至第 4 の文

献 (Quelle) を設定して幾つかあり得べき場合を想像するが、確信なく、手掛りを失って結論のないままに終わっている。彼の論文は再びより大きな構想のもとに書き継がれ始め (ZslPh., XXV, 1956, S. 329-363)¹⁾ 現在なお未完のまま中断されているが、ここでは専ら先ず C. と年代記の物語との関係が論じられている。比較は語彙、動詞の時制・アスペクト等の語法、構文、語順の相違および特に両者に反映しているヘレニズムの分析に至るまで多種多様に、かつ綿密に行われるが、しかしそれらの一つ一つは(全部ではないが)屢々見事であり、如何に信頼するに足りるとしても、それによって直ちに重大な決定を下し得るだけの力は持っていない。事実これらの多様で細かな比較分析は、むしろ自然なことであるけれども、論文の冒頭にオリエンティトされた方向に進められているのであり、彼の研究は、少くともこの問題に関する限り、フィロロジカルな方法が方向そのものの決定においては限界を持つものであることを示しているように思われる。彼の立論の第1の根拠は年代記 977, 980, 988 各年におけるヴラジーミルの子等に関する記述 (Sohneslisten) と C. の冒頭との比較であり,²⁾ ついでハマルト・ロスの年代記からの引用と見られる表現の比較であって、ここで最早 C. が年代記の物語に依存するものであることは明らかだと主張するのである。C. は年代記の物語よりは遙かに長いが、ついでミュラーは C. の年代記の物語には無い部分について第2の書かれた Quelle の存在を考え、それがギリシャ語で書かれた或る種の聖者伝(余りはっきりしない)であることは疑いないとしている。このギリシャ文献の復元をやがて試みる意図のあることを述べているが、論文の後半はこの文献の性格と特徴について若干敷衍し、更にこの文献、ボリス・グレープ伝説、年代記の物語および C. の間の複雑な系譜を仮定することで終わっている。

II.

以下に訳出するのは C. の上述 (a) の写本に該当する部分である。遺憾ながら一貫したテキストが手元にないために、つぎの3つのアンソロジーによってそれを「復元」する他はなかった。

<1> Н. К. Гудзий, Хрестоматия по древней русской литературе XI~XVII веков, Москва, Изд. 6-ое, 1955.

<2> Ad. Stender-Petersen, Anthology of Old Russian Literature, (In collaboration with S. Congrat-Butlar), Columbia Univ. Press, 1954.

<3> R. Trautmann, Altrussisches Lesebuch, Teil I. 11.—14. Jahrhundert, Leipzig, 1949.

1) 但しその前に、第1と第2の論文の間に、彼が他の場所で発表した2つの論文 („Die nicht-hagiographische Quelle der Chronik-Frzählung von der Ermordung der Brüder Boris und Gleb und von der Bestrafung ihres Mörders durch Jaroslav“ in: Festschrift für D. Čyževskij, Berlin, 1954, S. 196-217. および „Zur Rekonstruktion des Načal'nyj Svod der altrussischen Chronik aufgrund des Skazanije über Ermordung der Heiligen Boris und Gleb“ in: Festschrift für M. Vasmer, Berlin, 1956, S. 341-348.) があり、それを筆者は見ている。一方これらの間に彼は第1の論文における彼の仮定を捨てて、Ч. は C. に基くものであると考えるに至った。しかしそれに対する論証は未だ行っていない。

2) この点に関するイリインの正反対の解釈については、Н. Н. Ильин, Летописная статья..., стр. 196-7 参照。

幸い3つのアンソロジーに共通して省略された箇所は極めて僅かであったが、その場合にはドイツ訳〈4〉(これにはまた別な省略——ヤロスラーフとスヴァトポルクとの闘争——がある)のみに拠らざるを得なかった。〔 〕で示してある。

〈4〉 W. Fritze: „Erzählung von den beiden Duldern und hl. Märtyren Boris und Gleb“ in: „Russische Heiligenlegenden“, hgb. von E. Benz, Zürich, 1953, S. 50-73.

〈1〉, 〈2〉, 〈3〉のすべてに収められている部分(全体の60~70%)については〈1〉に拠ることを原則とした。〈2〉或いは〈3〉のテキストのみに拠った部分について一々明記することはしなかった。「異本には」として適宜註(総じて最少限度に止めた)において補綴した部分の出所は様でない。一応「実用的」に差し支えない資料としての「復元」はできたと信ずるけれども、勿論これでよいわけではないので、他日機会を得たならば両びやり直す必要もあろう。同じ「実用的」観点から、達意を主として文体は従とし、正確を期したが原文の一言一句に徒らには拘泥しなかった。叱正を乞う次第である。

聖なる殉教者ボリースとグレープの物語と受難と賞讃

『^{ただ}義しき人の^{やから}族類は祝福を得ん』と予言者は言った、『^{かかる}人の^{すえ}裔はさいわいなり。』

さてこのようであったのは、これらの年の少し前¹⁾、スヴァトスラーフの子、そしてイーゴリの孫たるヴラジーミルがロシア全土の独裁者であった時のことである。彼は聖なる洗礼によってルーシの全土に光明をもたらしたのである。その他の彼の功德については我等は他の場所で語るであろう、今はその時ではない。彼等公達について順を追って述べるならばつぎのようである。ヴラジーミルは12人の息子を持っていた、1人の妻からではなく、別々の母達から彼等を得たのである。彼等の中で最年長であったのはヴィシエスラーフ、ついでイジャスラーフ、3番目がスヴァトポルクで、彼こそがこの兇悪な殺人を企んだのであった。この者の母はギリシャ人であり、かつて修道女であった。彼女をヴラジーミルの兄ヤロポルクが獲得し、その美貌の故に彼女を還俗せしめ、そして彼女にこのスヴァトポルクを孕ませたのであった。未だ異教徒であったヴラジーミルはヤロポルクを殺し、懐胎していたその妻を奪った。そして彼女からこの呪うべきスヴァトポルクは生れた、兄弟たる2人の父親から生れたわけである。それ故にヴラジーミルは自分の子ではないとして彼を好んでいなかった。また(ヴラジーミルは)ログネーダからは4人の息子を持っていた、イジャスラーフ、ムスチスラーフ、ヤロスラーフ、フセーヴォロトである。²⁾ また別の妻からはスヴァトスラーフとムスチスラーフを、ブルガリヤの女からはボリースとグレープを得ていた。そして彼等を各地の公の位置につけたのであるが、このことについては

1) この冒頭の部分の意義は明瞭でない、いわゆる темное место である。「これらの年」は単にこの作者の執筆の時代(我々には不明の)を指し、何かの事件に結びついた特定の年を指しての表現ではないかも知れないが、しかしまたヴラジーミル死後の紛争の時代、以下に述べられる物語の事件があった時代、即ち1015年以後の数年間を指すとも考え得る。とすれば冒頭の「これらの年の少し前」に「このようであった」こととは、コンテキストから、以下直ぐに述べられているようにヴラジーミルがその子等を各都市に据えたことを指すものと解される。Н. Н. Ильин, Летописная статья..., стр. 23-24 参照。

2) 異本ではここに「チェックの女からはヴィシエスラーフを」と入っている。

我等は他の場所で語るであろう。¹⁾ この物語が他ならぬその人々についてのものであるところの公達についてこそ我等は語ろう、即ち(ヴラジーミルは)この呪うべきスヴァトポルクをピンスクに公として据え、ヤロスラーフをノーヴゴロトに、ポリースをロストーフに、グレープをムーロムに据えた。だが私は多言することをやめよう、多々書き連ねる中に我等が自分を見失い、本筋を離れてしまわないように。彼(ヴラジーミル)について(私は述べ)始めた、でそれらのことを先ず述べるであろう。多くの日々が過ぎ去ってヴラジーミルの治世は終りつつあった、聖なる洗礼の後28年を経て彼は重病に陥ったのであった。その時ポリースはロストーフからやって来ていた。ペチェネーク族が到る処から再びルーシに進攻しつつあり、ヴラジーミルは深い憂慮に閉ざされていた、彼等を邀撃しに行くことができなかつたからである。深く嘆いていたが、祝福された、従順なるポリース——彼は洗礼に際してロマーンと命名された——を呼んで、多数の軍勢を彼の手に委ね、神無きペチェネーク族に向わせたのであった。彼は喜んで征途に就き、つぎのように言った、「あなたの御心が命ずるところならば、何事であれ、あなたの眼前で(直ちに)致す覚悟であります。」かかる人について箴言の作者は言ったのである、『われは父には従順なる子、我が母の目には愛子^{いしこ}なりき』と。

彼は去ったが、自分の(目指す)敵に遭わなかつたために、やがて帰途に就いた。その時彼のもとに父の死を伝える使者が到着した、彼の父ヴァシーリイ——洗礼に際してこの名が与えられたのである——が逝ったこと、スヴァトポルクが父の死を秘し、夜ベレストヴォ(の邸)で床板を打ち抜き、(遺骸を)絨氈^{なわ}に包み、索で地面に下ろし、櫓^こに乗せて運び²⁾ 聖母教会に彼を安置したことを伝えたのである。これを聞いてポリースは体中の力が萎え、彼の顔はすべて涙で蔽われた。涙にかき暮れて、物も言い出し得ず、自分の心の中でこう言った、「悲しいかな、我が眼の光明、我が面の光輝、黎明、我が若さを制する手綱、我が愚かさを正す準繩! ああ、我が父、我が君よ! 今や私は誰に頼り、誰の教えを仰いだらよいか? 何処において賢明なあなたのあのようなすぐれた教えと論しに渴きをいやすことを得ようか? ああ悲しいかな、悲しいかな! 何故私のおらぬ間に、我が光明よ、おかくれになったのか? せめて私自身の手であなたの尊い御体を整え、柩にお収めしようものを、しかるに私は武勲まばゆいあなたの御体を運ぶこともなく、³⁾ 美しい白髪に口づけすることも叶わなかつたとは。逝ける父よ、願わくは休息の中にあつて私を思い出し給え。我が心は燃え、魂は乱れて我が思いを惑わし、誰に向つて訴えるべきか、誰にこの苦き悲^{にが}しみを吐露すべきかを知らない、私にとって父に代るべき筈の兄にか、——だが彼は、私が

1) 作者はヴラジーミルの子等を先ず年長の順にスヴァトポルクまで挙げ、ついでまた母の別に從つて挙げてきたが、しかしここでヴラジーミルの子等とその封土に関する叙述を未完のまま中断し、物語のテンポを速めて、つぎの4人の公に焦点を合せた。

2) 「床板を... 櫓に乗せて運び」——古代スラヴ人の葬儀の習慣で、死者を搬出するのに通常の出入口を避けること、絨氈(一説によれば実は白い経帷子)や櫓(季節に関係なく)を用いること等には、それぞれ象徴的な意味がこめられていた。

3) *нъ то ни понесохъ красоты мужства тѣла твоего*——2つ抽象名詞が並んでいる。Fritze (<4>, S. 56) 訳は: aber nun habe ich die mannhafte Schönheit deines Liebes nicht getragen. L. Müller, Studien zur altrussischen Legende... , ZslPh., XXV, 1956 (以下 L. Müller (2) と略記), S. 357. 参照。

思うには、虚しい俗世の業に溺れており、私の殺害を目論んでいよう。若し飽くまでも私の殺害を果す積りなら、私は我が主のための殉教者になるであろう、私は抵抗すまいから、何故なら『神は傲る者を拒ぎ、謙だる者に恵みを与え給う』と書かれており、かの使徒は『われ神を愛すと言いて、その兄弟を憎むは偽る者なり』と言っている。そしてまた『愛には恐れなし、全き愛は恐れを除き捨つ』ともある。とすれば私は何を言い、何を行うのがよいか？ 私は兄のもとへ行って言おう、あなたが私の父になってほしい、あなたは私の兄で年長なのですから、兄君よ、私に何を命じになりますか？ と。」

こうひとり思い廻らしつつ、兄のもとに向い、心の中でこう言うのであった、「ともあれ我が弟グレープの顔を見ることが出来るのだから、ヨシフがベニヤミンを見たように。」そしてこれらのことをすべて心に秘めて、「あなたの御旨の成らんことを、我が主よ！」と言うのであった。しかしまた心の中に思い廻らすのであった、「私が父の家に向えば、恐らくは多くの者共が、私の心を説き伏せて、私に兄を追い出させようとするだろう、かつて父が洗礼を受ける以前に、蜘蛛の糸よりもか細い、東の間のこの世の栄光と公位のためにしたと同じように。——そうならこの世を去って後私は何処に行きつくことであろう？ それから私は一体どうなるであろう？ 私はどんな報いを受けるであろう？ 数多い我が罪を何処に隠し了せようか？ かつて我が父の兄弟や我が父は果して何を得たであろうか？ 彼等の富やこの世の栄光は今や何処にあるか、帝王の緋衣も錦欄の類も、金銀も、酒も蜜も、美味珍肴も駿馬も、豪荘な邸も、数多の財物も、数知れず受けた荣誉や貢物も、貴族達を擁する誇りも、何処にあるか？ はや今となつては、これらは初めから一切無かったようなもので、すべては彼等とともに消滅した。これらの中の何物からも救いは得られない、財物からも、数多の奴隷からも、この世の栄光からも。それ故にこそソロモンは、すべてを経、あらゆるものを見、あらゆるものを得、集め、そしてあらゆるものを熟考して後言った、『すべては空にして、空の空なり』と。善き行いと正しき信仰と偽りなき愛のみによって救いは得られる。」

途を辿りつつ彼は自分の体の健かな美しさを思い、さめざめと涙を流し、堪えようとして堪えることができなかつた。人々はこうして涙に暮れている彼を見て、皆(立派に)成人した彼の高貴な体と高邁な分別とを惜しんで泣いた、各々胸の痛みに呻き、悲しみに心はかき乱れたのであった。

けだしあのような非業の死を予見して誰か泣かぬ者があろうか？ その眼差、胸の悶え、聖者(ボリース)の姿には暗澹たるものがあつたのである。まことにこの祝福された人は心正しく、憐れみ深く、静かに温和で、謙虚であり、すべての者を慈しみ、あらゆるものを氣遣つたのであった。

神に祝福されたボリースはひとり思い廻らし、そして言った、「奸悪な者達が兄に私の殺害を迫り、私を亡き者にしようとしているのを私は知っている。私が犠牲の血を流せば、私は主のための殉教者となり、我が魂を主は受け入れ給うであろう。」

やがて死の悲しみを忘れて、彼は神のことばに心を慰めるのであった。『我がため、また福音のために己が生命を失う者は、これを保ちて永遠の生命に至るべし。』

そして晴れやかな心になって、彼は「いと恵み深き主よ、あなたを恃む私を拒げ給わず、我が魂を救い給え」と言い、前進した。

スヴァトポルクは父亡き後キエフに君臨した。キエフの人々を呼び集め、多くの祝儀を与えて後去らしめた。ボリースに使者を送って言った、「兄弟よ、お前と協調して行きたい、私は父がお前に与えたものに更に付け加えよう。」欺瞞であり、真実を言ったのではなかった。夜ひそかにヴィシュゴロトに来てプチシャおよびヴィシュゴロトの貴士達を呼び寄せ、¹⁾ 彼等に言った、「ありのままに述べよ、お前達は私に忠実に従うかどうか？」プチシャは言った、「我等は皆あなたのために首を横たえることを厭わない。」

悪魔は劫初より善人を憎悪しているが、聖なるボリースがすべての希望を主に托したのを見て、より繁く活動し始め、かつてカインをして兄弟殺しに心を燃えさせたように、今また正しく第二のカインたるスヴァトポルクをして、父のすべての相続者達を除き、自分が全権力を独占しようという考えの^{こりこ}俘囚としたのである。

かくて邪悪な、呪いに呪われたスヴァトポルクは、あらゆる悪事の助言者達、あらゆる不正の張本人達を喚び寄せ、忌わしい口を開き悪声を響かせて、プチシャの郎党に言った、「^{こりこ}首を横たえると誓ったからは、我が兄弟よ、密かに行き、弟ボリースを見つけ次第、折を窺って、彼を殺せ。」彼等はそのように行うことを彼に誓った。

このような者達について予言者は『彼等はいわれなき血を流すに速し、常に流血の事を謀り、己れに悪を集むる者等なればなり。彼等の道は不正を集むる道にして、汚辱もて己が魂を塞ぐなり』と言ったのである。

祝福されたボリースは帰還してアリタ河のほとり²⁾に幕舎を張った。その時^{ドウルジーナ}従士団は彼に言った、「行ってキエフの父君の座につかれよ、御覧の通り全軍勢があなた的手中にあります。」彼は彼等に答えた、「私より年長の兄、父とも思う兄に向って私に手を挙げさせるな。」

これを聞いて軍勢は彼を離れて去り、彼とともにあるのは自身の少年従士達のみとなった。それは土曜日に当たっていた。彼は心重く憂いと悲しみに沈み、自分の幕舎に入った。千々に乱れる心としかも晴れやかな魂とに泣きながら、切々と訴えて言った、「我が涙を拒け給うな、主よ。私はあなたを待み、あなたの僕達と並んで(殉教の)運命に就き、あなたの諸々の聖者達にあやかりたいと願います、もとよりあなたは恵み深い神であられ、私共はあなたに^{まことしえ}永遠の讚美を捧げます。アーメン。」

彼は同様にして殺された聖ニキータ、聖ヴァチェスラーフ(ヴァーツラフ)の苦難と殉教を、また聖ヴァルヴァーラの父がその殺害者となったことを想った。そして賢明なるソロモンのことばに思い到った。『義人は永遠に生き、主よりの報い、いと高き者よりの保証彼等にあり。』ただこのことばにのみ慰めとよろこびを見出したのであった。

1) ヴィシュゴロト、又はヴィシエゴロト——キエフの北方約 15 km, ドネーブル河の右岸にある。但し他にも同名の町が幾つか知られている。スヴァトポルクはこの町の公であったと言うよりは、彼とボレスラフ I 世の妹である彼の妻およびコルベルクの司教レインベルンが、ボレスラフ I 世と通じて、ヴラジミールに対する陰謀を企て、それが洩れたためにこの町に配され、監視されていたと考えられる。プチシャはヴィシュゴロトの長(воевода)であろう。мужьを貴士と訳しておく。

2) アリタ(又はリト、又はオルタ)——キエフの南東、ドネーブル河の中流左岸流域ペレヤスラーヴリ附近の支流トルーベシュ河の支流、又はその周辺一帯。キエフとペレヤスラーヴリとのほぼ中間、キエフから 1 日の行程にあり、遊牧民族のキエフへの攻撃路に当たっていた。

やがて夜となった、彼は晩課の誦唱を命じ、自らは幕舎に入り、苦き涙とともに交々嘆息し呻吟しつつ夕べの祈禱を始めた。その後彼は寝に就いたが、彼の眠りは殉教の死に遭うこと、苦しみ、命を終り、そして信仰を守ること、やがて全能の神の御手から自分に用意された冠を受けるであろうこと、など様々の物思いと深い悲しみとに充ち、重苦しく怖ろしいものであった。暁方に眼覚めて朝課の時刻であることを知った、——聖なる主の日であった、¹⁾——彼は自分の司祭に言った、「起きて朝課を始めよ。」自らは足を固め、²⁾顔を洗って、主なる神に祈り始めた。

スヴァトポルクによって遣わされた者達はその前夜アリタに到り、近ずき来って、朝課の聖歌³⁾を唱する殉教者(ボリース)の声を聞いた、——彼は自分の殺害(計画)のことについて知らせを受けていた。彼は『主よ、我に仇する者の始何に蔓延れるや、我にさからいて起り立つ者多し』と唱し始め、この聖歌を全部終えた。また詩篇を唱し始めた、『多くの犬我をめぐり、力つよき牡牛我をかこめり。』更にまた『主よ、我が神よ、われ汝に倚り恃む、我を救い給え。』そしてそれについて讚美歌を唱した。朝課を終って彼は主の像を仰ぎ、祈り始め、言った、「主よ、イエス・キリストよ、かかる御姿をもって地上に現れ給い、自ら十字架にかけられることを択び給い、我等の罪のために苦難を受け給うた主よ、我にもまた苦難を受けることを得させ給え！」

悪しき者達のざわめきを幕舎の周りに聞き、戦慄して、彼は両の眼から涙を流し、言った、「主よ、なべて栄光汝にあれ、嫉み(兄弟の)に因って私に苦き死を得さしめ、みことばへの愛のためにすべてを忍ぶことを得さしめ給うたことに。私は敢て自ら活路を見出だそうとはせず、我が身に何事をも希わず、かの使徒のことばに『愛は凡そ事忍び、凡そ事信じ、己れの利を求めず』とあり、また『愛には懼れなし、全き愛は懼れを除く』とあるのに従いました。それ故、主よ、あなたの掟を忘れざりし故に、我が魂は常にあなたの御手の中にあります、主の善しと観給いし始くならんことを。」彼の司祭と彼に仕えていた少年従士の一人は、悲しみに濡れ、絶え入らんばかりの主君の姿を見て、いたく慟哭し、言った、「我等の愛する、尊い御主人様！何という気高さに充ちておられたことか、あれ程の軍勢を手にとめておられながら、キリストの愛のために兄上に抗らおうとはなさらなかった！」

こう言って彼等は同情の念に駆られた。と忽ちその時幕舎めがけて走って来る者達を、武具の光と刀剣の閃きを⁴⁾(ボリース)は見た。そして聖なる、祝福された、キリストの殉教者ボリースの尊い、哀れな体は無残にも刺し貫かれた。槍を突き刺したのは呪われた者共——プチシャ、タレツ、エロヴィチ、リャシュコであった。これを見て彼の少年従士は「あなたをお見捨ては致しません、尊い御主人様！美しい御体の萎え尽きるその場で、私にも命を終らせて下さい」と言いつつ、彼の体の上に身を投げた。

1) 「聖なる主の日(日曜日)であった」(бѣ же въ святу ю недѣлю). 挿入された感じがぎこちないので、この句をミュラーは古い写本にあった傍註と考えるべきだとしている。少し前に既に「それは土曜日に当たっていた」(бѣаше въ днь субботуны)と述べてあるし、また朝課は日曜日にのみ行われるものだからである。L. Müller (2), S. 347.

2) 脚絆(обувь)をつけ。

3) псалмы. 「原初年代記」(Пов. вр. л., Под ред. В. П. Адриановой-Перетц, М.-Л., 1950, I, стр. 91)では експсалма „Hexapsalm”.

4) мечное оцѣщение—Гудзий (<1> стр. 45): мечное обнажение. L. Müller (2) S. 360 参照.

この者は生れはハンガリヤ人で、名はゲオルギであった。(ボリースは)彼に金の頸飾りをかけてやり、彼はボリースに非常に愛されていた。彼もその場で刺し貫かれた。傷を負ってボリースは倉皇として幕舎の外へ出た。彼の周りに立っていた者達が言い出した、「何を見ながら立っているのか？ 近ずいて我々の命ぜられたことをやり終えよう。」これを聞いて祝福された人(ボリース)は彼等に懇願し、同意を乞いつつ言った、「愛する、優しい我が兄弟達よ！ 僅かの時を与えよ、私が我が神に祈る間だけでよいから。」そして涙とともに空を仰ぎ、深く嘆息して、つぎのような言葉をもって祈り始めた、「我が主、いと恵み深き神よ¹⁾ 栄光あれ、私をして現身の迷いを去るを得させ給いしことに。栄光あれ、いと寛容なる生の附与者よ、聖なる諸殉教者の苦しみに私をも遭わせ給いしことに。栄光あれ、私をして心の希いを遂げるを得させ給いし博愛なる主よ。栄光あれ、キリストよ、我が平和の歩みを正しき道に導き、躓くことなくひたすらに御許に近づくを得させ給いし遍ねき慈悲に。聖き高みより見給え、肉親の者から受けた我が心の苦患を視給え、あなたのために私は終日死に付され、屠られるべき羊の如くに目されました。主よ、あなたは私が抗らわぬこと、抗言せぬこと、父の全軍勢、父によって愛されたすべてのものを手に収めながら、我が兄に対して何事をも企てなかったことを御存知です。しかし兄はそうではなかった、彼はこれらの者共を私に向い起たせたのです。だがそれでも私は、敵が私を誘うならば忍び、私を悪む者が私に向って声高に叫ぶならば身を隠して避けたでしょう。主よ、私と我が兄との間のことを見、裁き給え。しかしこの罪を、主よ、彼に負わせ給わず、我が魂を御許の平安に受け容れ給わんことを。アーメン。」

それから哀切なる眼差しと衰え細った面を彼等に向け、涙にかき濡れて、言った、「兄弟よ、近ずいてお前達の任を果せ。我が兄に、そして兄弟よ、お前達に平安あれ。」

彼のことは聞いた者達は皆涙のために——畏れと悲しみと滂沱たる涙にさえぎられて、一言も言えず、深い嘆息とともに哀哭しつつ、各々心の中に言ったのである、「あわれ、愛しく尊い、祝福された我等の公よ、盲者の導き手、裸かなる者の暖衣、老人の杖、無知なる者の教師よ！ この後誰がこれらの者を慰め助けるであろうか？ まことにこの人はこの世の栄光を望まず、貴顕の士と打ち連れて楽しむことを望まず、人の世での権勢をも望まなかった。この人の謙虚さにおどろかぬ者があるか、このような謙虚さを見、聞いて自らも謙らぬ者があるか？」と。

その場で生ける神の御手に魂を委ねて彼は永眠った、8月朔日の9日前、7月24日のことであった。²⁾

多数の従士達も殺された。彼等はゲオルギイから頸飾りを抜き取り得ず、首を打ち落して、あらぬ方に投げ捨てた。そのため後になって人々は彼の遺体を見わけることができなかった。

祝福されたボリースを天幕にくるみ、車に載せて運んだ。松林にさしかかった時、ボリースはその聖なる首を擡げ始めた。これを知ったスヴァトポルクは2人のヴァリヤークを

1) Господи боже мой, [многомилостивый] и милостивый и премилостиве!

2) Н. Н. Ильин (Летописная статья. . . , стр. 64, 155)によれば、明らかに Julio XXIV ante diem IX Kalendas Aug. の訳であり、ロシア教会は事件の日付を記すのに Kalendae に拠ることはしなかったから、これは西欧の文献の例、恐らく「聖ヴァーツラフ伝」に倣ったものである。

遣わし、兩名はボリースの心臓を剣で突き刺した。こうして彼は逝き、不朽の冠を受けたのであった。¹⁾ ヴィシュゴロトに運んで彼の遺体を横たえた、聖ヴァシーリイ教会のかたわらに埋葬したのであった。²⁾

【彼は我等の神、キリストより冠を受け、^{ただし}義き人々の数に加えられた、彼は今や予言者達、使徒達そして殉教者達の群に入り、アブラハムの膝に憩い、言い表わし得ぬよろこびを知ったのである。彼は天使達とともに唱い、聖者達の群に伍して楽しげであった。

かの呪われた殺人者達はスヴァトポルクのもとに来った、この悪人共は恰も称讃をかり得た者の如くであった。このような家来は悪魔である、悪魔は悪しきことのために遣わされる者、天使は善きことのために遣わされる者なのであるから。天使は人間に悪しきことを行わず、人間のために善きことを常に希い、就中キリスト教徒を助け、敵なる悪魔から彼を護る。しかし悪魔は常に悪しきことへと誘う、神によって尊重されている人間を見るにつけ妬んでいる者達であり、人間を嫉み、悪しきことのために遣わされている彼等は(悪を為すに)敏速である。かつて神が『誰か往きてアハブを誘うや?』と言い給うた時、悪魔は『我往かん』と言ったのであった。悪しきことを志す悪しき人間は悪魔以上である。悪魔は神を恐れるが、悪しき人間は神を畏れず、人間にも恥じないからである。悪魔は主の十字架を恐れるが、悪しき人間は十字架を恐れない。それ故にダヴィデは言ったのである、『汝等は^{まこと}実に義を述ぶるや、正しき^{さばき}審判を行うや、人の子等よ?(否)汝等は心の中にこの地の掟に^{そし}背き、その手は^{あしきこと}悪事を擽り出すなり。悪しき者等は母の胎より背き遠ざかり、母の膝より迷い去るなり。彼等はいつわりを言う、彼等の^{あらび}兇暴は蛇のそれの如し』と。] (<4>, S. 63-64)

さて呪われたスヴァトポルクはこれで殺人を止めはせず、猛り狂って更に大それた殺人にとり掛ったのである。自分の心の欲望をば達したと見るや、忽ち自分の犯した悪しき殺人も、諸々の罪業をも憶わず、毫も後悔の色はなかった。しかもそこで直ぐさま彼の心にサタンが入り込んで、更により大なる、より甚しきことを、より多くの殺人を、犯せと唆かし始めた。呪われた者(スヴァトポルク)は心の中に言うのであった、「どうしようか? これまでのところで殺人の仕事を止めるなら、私は2つのことを待ち受けるばかりであろう。たとえ兄弟達は一旦は私になびくとしても、やがて先廻りして私に一層手ひどい仕返しをするだろうし、若しまたそうでないとしても私を^{そし}逐い出すであろう、私は父の公座を失い、封土への執著痛恨が私を焼き尽すだろう、私を^{そし}誘う者達の^{そし}謗りは我が身を襲い、公位は他の者が占め、我が屋敷内に生けるものとして残らぬであろう、何故なら主は彼を愛していた、ところがその彼を私はせめて、苦しみの上に深傷を負わせたのだから。私は不正に不正を重ねるのみ、何としても我が母の罪の^{ただし}浄められることはない、^{ただし}私は義き者と

1) 恰もボリースが2度死んだかのような記述と「首を擽げた」のをスヴァトポルクが如何にして知り、また何故別にヴァリャーギを遣ったかと言う疑問の解釈については、Пов. вр. л., II, стр. 358 (シャーフマトフの解釈), Н. Н. Ильин, Летописная статья... , стр. 185 и др.等を参照。

2) トゥヴェールスカヤ年代記, 1534年によれば、ボリースの遺体は船に乗せて一旦はキエフに運ばれたが、キエフの人々はこれを受け入れず, отпнухуша прочь とある。Пов. вр. л., II, стр. 359 参照。

3) 「兄弟たる2人の父親から生れた」ことを指す。

ともに記されることはなく、生くる者の冊^{ふみ}からは消されるであろう。」

果してどうなったかは後に語るであろう、——今はその時ではない、先のことに戻ろう。

このように心の中に思い定めて、悪魔の悪しき共謀者は祝福されたグレープを呼びに使者を遣り、言った、「速かに来れ、父がお前を呼んでいる、父の病いが極めて重い。」

彼(グレープ)は直ちに、僅かの従士団^{ドウルジナ}を伴い、馬に跨って出発した。ヴォルガ河に¹⁾到着してから、野原で彼を乗せた馬が窪みにつまずき彼は些か足を傷めた。²⁾ スモレンスクに到り、スモンレスクを発って進むこと程遠からず、スマジャナ³⁾で船上の人となった。その頃既にペレドスラーヴァ⁴⁾からヤロスラーフに父の死の知らせが届いていたのであった。でヤロスラーフはグレープに使者を送って言った、「行くな、兄弟よ、お前の父は死に、お前の兄はスヴァトポルクに殺された。」

これを聞いて祝福された人(グレープ)はこみ上げる悲しさに声をふり絞って号泣し、こう言った、「おお悲しいかな、我が主よ！2つの悲しみに私は泣き、呻きます、2つの嘆き故に嘆き、苦しみます。悲しいかな！悲しいかな！父を思って泣きます、それよりもっと、兄君ボリースよ、はげしい絶望の末に、あなたを想って泣きます。刺し貫かれたとは、無残にも遂に死に付^つされたとは！敵の手からならまだしも、自分の兄から死を得なされたとは。悲しいかな！あなたから引き離されてひとりこの世に生き永らえるよりは、あなたとともに死ぬ方がどんなによいか。私はあなたの天使のようなお顔にお目にかかれるものと思っていたのです。それがどうでしょう、こんな悲しい目に遭わされました、(それにしても)あなたと一しょだったら私は喜んで死んだでしように、我が君よ！みじめな私、徳高いあなたからも、こよなく賢明な我が父からも距てられて、私はこれから何をしたらよいのでしょうか？おお愛しい我が兄君よ！若しあなたが主の御許で敢えて物申すことを許されておいでならば、私の悲願のために祈って下さい、この惑わしの世にあるよりは、私もまた同じ殉教の死を得て、あなたとともに生きることを許されますように。」

彼がこのように嘆き、泣き、涙で地を濡らしていた時恰も、不意に、スヴァトポルクから遣わされた者達、彼の兇悪な家来達、無慈悲な吸血者達、野獣の魂を持った狂暴な同胞憎悪者達⁵⁾が到着した。

祝福された人は船に乗って出発し、彼等はスマジャナの河口で彼に出会った。彼等を見た時祝福された人は心から喜んだが、彼等は彼を見て険しく顔を曇らせ、彼の方へ漕ぎよせた。彼はしかし彼等から歓迎の礼を受けることとさえ思っていたのであった。両者の船が並んだ時、彼等兇悪な者達は水のように光る抜き身の剣を手に、彼の船に飛び移り始めた。漕ぎ手達の手から一斉に橈^{かい}が落ち、皆は恐怖に立ち竦んだ。祝福された人はこれを見て彼等が彼を殺そうとしていることを知り、懇願の眼差しで彼等を見、顔を涙に濡らし、苦悶する心と諦めの念いと、そして止め得ぬ嘆息とに涙に蔽われ尽し、体も萎えつつ、切

1) 異本では更に「チマ(河)の河口に」と敷衍されている。なお Пов. вр. л., II, стр. 359 参照。ムーロムを発ってキエフに向ったというグレープの、ここに記されたような迂遠な道筋については疑問が持たれている。

2) この事故には勿論不吉な前兆としての意味がこめられている。

3) スマジャナ——ドネーブル河の支流。

4) ヴラジーミルとログネーダとの間にできた娘。

5) братоненавидьници。

々と訴えて言った、「止めてくれ、愛しい、尊い兄弟達！止めてくれ、私はあなた方に何も悪いことはしなかった！私を勘忍してくれ、兄弟達そして目上の方々、¹⁾ 勘忍して下さい！何で私が我が兄を、またあなた方を、兄弟達そして目上の方々よ、侮辱しましたか？若し何かで侮辱したのならば、私を我が兄であり主君であるあなた方の公のもとへ連れて行って下さい、憐れんで下さい、私の稚さを憐んで下さい、目上の方々！あなた方は私の主人になって下さい、私はあなた方の僕です。熟さぬうちに生命の根から私を刈り取らないで下さい！未だ硬く熟さず、無垢の乳を含んでいるその穂を刈り取らないで下さい！²⁾ 未だ伸びきらず、漸く実をつけはじめたばかりの葡萄蔓を切り取らないで下さい！あなた方お願いします、嘆願します、使徒の口を藉りて『智慧においては子供となるな、悪においては幼児となり、智慧においては成人となれ』と仰言った方を懼れなさい。兄弟達、未だ私は人間の罪を知らず、年令も子供です。これは(私を殺すこと)は殺人でなくて、若木を伐ることです。³⁾ 私がどんな悪いことをしたのか教えて下さい、決して泣言は言いません。若し(どうしても)私の血に渴きをいやそうとなら、兄弟達よ、既に(見られる通り)私はあなた方の、そしてあなた方の公である私の兄の手の中に在るのです。」これらの中の一言半句にも彼等は顧みて恥じることなく、心を動かされることもなく、さながら野獣のように荒々しく彼を引き立てた。自分の言葉が聴かれないのを見て、彼はこう言い始めた、「さようなら、⁴⁾ 愛しい我が父、我が君ヴァシーリイよ！さようなら、お母さん、我が母君よ！さようなら、兄ボリース、幼い私の導き手よ！さようなら、兄であり助言者であったヤロスラーフよ！さようなら、あなたも、兄であり敵であったスヴァトポルクよ！さようなら、あなた方も、兄弟達よ、従士団よ！みんなさようなら！もう私はこの世ではあなた方にお会いすることはできません、今こうして私はみじめにもあなた方から引き離されます。」泣きながらまた言うのであった、「ヴァシーリイ、ヴァシーリイ、我が父君よ！耳を傾けて私の声を聴いて下さい、御覧下さい、あなたの子の上に起ったことを見て下さい。罪もないのに私は殺されます！悲しいかな、悲しいかな！『天も地も照覧あれ！』あなたも、ボリースよ、兄よ、私の声を聴いて下さい。父ヴァシーリイを呼んだけれども、彼は私(の訴える声)を聴き入れてくれなかった。とすればあなたも私を聴き入れては下さらないのでしょうか？私の心の苦しみを、魂の傷手を見て下さい！涙が川のように流れるのを見て下さい。誰も私を聴き容れてはくれない、あなただけはどうか私を忘れずに、すべての者の上に遍ねき主に私のことを祈願して下さい、あなたは主の御傍に在り、物申し上げることを許されておいででしょうから。」

また跪いてこう祈り始めた、「いと恵み深き主よ、我が涙から面を背け給うな、我が悲しみに御心を動かし、我が心の苦悶を見給え！何故に、如何なる侮辱の科で私は殺されるのですか？私には分りません、あなたは御存知です、主よ、我が主よ！私はあなたがかの使徒に仰言ったことを知っております、『わが名のために人々 汝らの上に手をくだし、汝

1) госпође мои (pl. voc.)

2) L. Müller, (2), S. 358-9 参照.

3) сыпоръвание. 語義について Срезневский (Материалы . . . , III, стр. 876) は保留しており, Stender-Petersen (<2>, p. 499) および R. Trautmann (<3>, S. 149) に拠った.

4) съпасися——ここではこの言葉は訣別の挨拶である (Гудзий, <1>, стр. 48 の註).

らの親族および朋友によりて汝^{わた}らに付されん。兄弟は兄弟を死に付し、汝らわが名の故に殺さるべし』と。また『汝ら苦難^{くるしみ}の中にありて汝らの魂を己が有とすべし』と。主よ、見そして裁き給え！主よ、我が魂は既に御許にあり、我等は父と子と聖霊に讚美を捧げます、今より絶えず、そして永遠に、永遠に。アーメン。』(〈4〉, S. 67-68)

それから彼等の方を見て、哀切な、静かな声で言った、「既にあなた方は来た。あなた方が遣わされたその任を果しなさい！」

その時呪われたゴリヤセルは速かに彼を刺し殺すことを命じた。グレープの料理番で名をトルチン¹⁾と言う者が庖丁を抜き、祝福された人を引き捉え、仔羊のように温和しくしているのを突き殺した、9月5日、日曜日のことであった。

清き、芳香馥郁たる犠牲は主に捧げられ、主に近く天上なる住家に上って、慕い焦がれた兄に相見え、ともに祈求していた天上の冠を受けたのであった。ともに得たこの言い表わし難い喜びに²⁾兄弟は歓喜したのであった。³⁾

かの呪われた殺人者共は帰り、彼等を遣わした者のもとに来った。まさしくダヴィデが言った如くであった、『悪しき者等は陰府^{よみ}に帰るべし、神を忘るるもろもろの国民もまたしからん』、或いはまた『悪しき者等は剣を抜き、弓をはりて心正しき者を殺さんとせり、されどその剣はおのが胸を刺し、その弓は折られて、悪しき者等滅ぶべし』と。そして彼等がスヴァトポルクに「汝によって命ぜられたことを我等は果した」と告げると、これを聞いた彼は心高く驕り、ここに伶人^{うたび}ダヴィデの言ったことが実現したのであった、『汝いかなれば悪しき企てをもて自ら誇るや、猛き者よ！汝の舌は終日不正と虚偽をはかれり。汝は善よりも悪を好み、正義^{ただしき}を言うよりも虚偽を言うを好み。汝はすべての破滅の言と奸智の輩とを好み。されば神はとこしえまでも汝をください、汝を引き抜き、汝の棲家より去らしめて、生けるものの地より汝の根をたやし給わん。』

こうしてグレープは殺され、2つのコロダ⁴⁾の間に入れて荒地に遺棄された。だが主はその僕達を見捨て給わない、『主は彼等のすべての骨をまもり給う、その一つだに折らるることなし』とダヴィデが言ったように。

この聖者はなお永い間横たわっていたが、主は彼をいつまでも知られることなく、問われることもなくそのままにしてはおかれず、現わし給うた。人々は或る時は火の柱を、或る時は燃える数箇の灯を見た、また通りかかった商人、或いは狩する者、牧者等は天使の歌声を聞いた。これらのことを見かつ聞きながら、しかし誰一人として未だこの聖者の遺体を尋ね出すことには思い到らなかった、⁵⁾ ヤロスラーフがこの悪しき殺人を忍び得ず、この

1) トルコ系の遊牧民族(Торки)の出と考えられる。Пов. вр. л., II, стр. 360.

2) 異本および「原初年代記」では、「彼等の兄弟愛によって得られた喜びに」とある。C. の作者が年代記の記述を基にしていることを主張するミュラーは、C. の作者は「彼等の兄弟愛によって」(братолюбьем своим)をドグマ的見地から削除したのだと述べている。L. Müller (2), S. 341.

3) 異本には更に「視よ、2人の兄弟相睦みてともにおるは如何によきかな」(詩篇 133, 1 参照)と付け加えられている。

4) コロダ(колода, клада)は松の木等を丸木舟状に刳った棺で、2本というの一方に死体を入れ、同じように刳ったもう一方で蓋をしたのである。

5) この部分はラヴレンチイ年代記には欠けているが、ノーヴゴロト第1年代記の諸写本中に殆んどそのまま見出される。

兄弟殺し、呪われたるスヴァトポルクに向って起ち、幾度か彼と戦いを交えるまでは、そして神の助けと両聖者の加護によって戦いを交える毎に常に勝利するまでは、呪われた者は恥を曝し、敗れて退いたのである。

最後に、この呪いに呪われた者は多くのペチェネーク族を率いて攻め来った。ヤロスラーフは軍勢を集め、彼に向いアリタ河に出撃し、かつて聖ボリースの殺された場所に立った。彼は天に向って手を挙げ、言った、「我が弟の血は、かつてのアヴェルの血のように、あなたに訴えて叫んでいます、主よ、彼を誅し給え、あの兄弟殺しのカインに呻吟と戦慄を下し給うた¹⁾ように。願わくは、主よ、彼がその罪にふさわしい報いを受けんことを。」そして祈ってから、言った、「我が兄弟達よ！その面影は既にこの世を去ったが、恩寵によって生き、主に仕えておられよう。祈りによって我を助けよ。」

彼がこう言い終えるや、両軍は互いに進撃した。アリタ河の野を大軍勢を以て蔽い、夜明けとともに会戦し、激烈ただならぬ戦闘が行われた。3度会戦し、一日中絶え間なく干戈を交え、漸く夕刻に至ってヤロスラーフが打ち勝った。そして呪われたスヴァトポルクは逃走し、その彼に悪魔が襲いかかった。彼の骨は萎え弱り、ために彼は馬に乗ることもできなかった。担架で人々は彼を搬んだ、彼もろともにベレスチエ²⁾に逃げ込んだのであった。だが彼は言った、「もっと逃げろ！見よ我々を追いかけて来る！」で、もと来た方へ見張りをやったが、彼の後から迫り迫って来る者は全くなかった。彼は病み衰えて横たわりながら、跳び起きては言うのであった、「もっと逃げよう！まだ追いかけて来る！ああ、いけない！」同じ場所に堪えていることができないのであった。神の怒りに逐われつつ彼は逃げ、リャフの地を過ぎ、チェック人とリャフ人の地境いの³⁾荒地に逃げついた。そしてそこで悲惨の中に己れの命を終えた。彼に下された死に至る苦しみが証拠だてたように、彼は主から報いを、そして死後には永遠の苛責を受けたのである。即ち彼は2つの生を奪われたのであった、此処では公国ばかりでなく命をも失い、彼処では天国に、そして天使達と伍しての生活に、入り損ねたばかりか、苛責と業火に遭わせられたのである。彼の墓は今日に至るまであり、人々への見せしめに厭わしい悪臭がそこから発している。[このことを聞き知って後に、誰か同じ事を行う者があれば、その者は更により重い罰を蒙るのである。その身に報いのあることを知らなかったカインは一つの罰を受けただけであったが、カインの先例を眼のあたりに見たラメクには70倍の罰による報いがあったのである。⁴⁾ こうしてこのような悪人共には応報がある。多くの殉教者の血を流した皇帝ユリアン⁵⁾が、誰に槍で突き刺されたとも知られず、人間にはあるまじい惨い死を遂げたように、

1) положи стенание и трясение. 創世記 4, 12 には『さまよう流離子となるべし』——стения и трясыйся будеши.

2) ポーランドとの国境、西ブーク河の中流河畔、プレスト・リトフスク。

3) межю чехы и ляхы——具体的な地理的意味はなく、古い諧謔的な言い廻しで「何処とも知れぬ遠いところ」の意であると解される。この表現はアルハーンゲリスク地方に最近まで残っていたと言われ(Пов. вр. л., II, стр. 367), また同じく古いポーランドの表現(midęzy Czechy i Lechy)の引き写しであるとも言われる(Н. Н. Ильин, Летописная статья..., стр. 44).

4) 創世記 4, 24 には『カインのために7倍の罰あれば、レメクのためには77倍の罰あらん。』

5) 背教者ユリアン。マラルースの年代記に出てくるその加害者の名(メルクリウス)を作者は知らなかったのかも知れない。

逃走しつつ彼もまた、誰によってとも知られぬまま、惨い死を遂げたのであった。] (〈4〉, S. 70)

これより後、ルーシの地に擾乱は止み、ヤロスラーフはルーシの地の全権力を握り、彼は両聖者が如何にして、また何処に葬られているか、その遺体を尋ね求め始めた。聖ボリースについてはヴィシュゴロトに葬られていることが彼に報告された。しかし聖グレープについては誰も知らず、ただスモレンスクで殺されたことを知っているだけであった。とかくする中その地方から来た人々の、荒野で光と幾つかの灯を見たという話が彼に伝えられた。これを聞いて彼は、それは我が弟であると言い、探索のため数人の司祭を遣った。彼等は人々が見たというその場所で彼を発見したのである。一行は十字架を捧持し、¹⁾ 礼を厚くして進み、彼を船の中に横たえ、帰って来て、ヴィシュゴロトの至福を享けたボリースの遺体が横たわっている同じ場所に彼を葬った。土を掘り、更めて彼を埋葬したが、その美わしく神々しいばかりであることを訝った。²⁾

それはまことに奇しきことであり、驚くべきこと、銘記するに足ることであった！幾才もの間横たわっていたにも拘らず、この聖者の体は損われないうでいた、始何なる肉食獣によっても、死者達の骸が往々されるように汚損されてはいなかったのみならず、浄く、美しく、完全で芳香がしていた。神がそのように己れの殉教者の体を守り給うたのである！

多くの者がそこに横たわっている聖なる両殉教者の遺体のことを知らなかった。だが主はこのように言われたのである、『山の上にある町は隠ることなし、また人は燈火をともして柵もて覆わず、燭台の上に立つ、かくて燈火は凡て暗きものを照すなり。』そのように主はこの両聖者を立てて、この世に照り、数々の奇蹟をもって宏大なるルーシの国に輝き渡るようにし給うた。そしてこの国では数多の難める者が救われている、盲者が見え、跛者が羚羊よりも疾く走り、せむしが真直ぐになったりしている。

だが果して行われつつあるすべての奇蹟を私は物語り、或いは伝え得ようか？まことに全世界もそれを容れるに足りぬ程諸々の驚くべき奇蹟が行われ、海辺の砂粒よりもその数は多い。またこの国だけではない、すべての国、すべての地をめぐって、両聖者はあらゆる病いと患いを追い出し、牢獄にあって鎖に繋がれている者達を訪れている。

両聖者が殉教の冠を戴いた場所に当る地方では、それぞれ彼等の名において教会が建てられた。そして其処でもまた彼等は訪れて大いなる奇蹟を行ったのである。

それ故にあなた方両聖者を如何に讚美すべきかを私は知らない、何と云うべきかに迷う、そして分らない。悲歎に暮れる者の傍らに即刻現われるあなた方を天使と名付けようか？だがあなた方は肉体をもって人の世を生きられたのであった、³⁾ 皇帝と或いは公と称したらよいだらうか？だがあなた方は人間に能う限りを超えてつつましく、謙虚であり、そのような謙虚さを得ておられたが故に、いと高きところの住家に迎えられたのであった。

まことにあなた方は皇帝の中の皇帝、公の中の公である。何故ならあなた方の支援と守

1) 異本には「十字架と数多の灯明と香炉を捧持し」

2) この部分もノーヴゴロト第1年代記に、多少の異同はあるが、見出される。これに反してラヴレンチイ年代記の叙述は極めて簡単である。

3) Гудзий (〈1〉, стр. 50) ではここにつぎの句がない：「あなた方を人と呼ぼうか？だがあなた方は数々の奇蹟や弱き者達への訪れによって人智の及ぶ域を遙かに超えている。」

護とによって、我等の公達は敵対して起つ者共を力強く打ち破り、あなた方の力添えを誇りにしているのである。故にあなた方は我等の武器であり、ルーシの地の防壁であり、支えであり、そして両刃の剣であり、それをかざして我等は異教徒¹⁾の傲慢さを挫き、また悪魔の尊大さを地に踏みにじるのである。まことに躊躇なく私は言うことができる、あなた方は天界の人間であり、地上の天使であり、我等の地の柱、支えである。であればこそあなた方は父祖の地を守護し、まさしく自らの郷党を思って『彼等の楽しむ時彼等とともに我あらんも、かくてまた彼等の滅ぶ時たらば彼等とともに我死ぬべし』と言った大ドミトリイの如くである。だがこの大ドミトリイは一つの町についてこのように述べたに過ぎないが、あなた方は一、二の町や地方についてではなく全ルーシの地について気遣い、祈られたのである。おお、貴重な宝であるあなた方の気高い遺体を収めた幸福なる墳墓よ！祝福を享けたあなた方の遺体の入っている聖なる 2 つの柩の置かれた幸福なる教会よ！おお、キリストの 2 人のよき僕よ！自らの中にこのような宝を蔵する最高^{さいわい}の町もまたまことに幸福である、ルーシのすべての町にまして高く、全世界もこの町には及ばない。その名をいみじくもヴィシュゴロトと言う、すべての町にましていや高い、最高^{さいわい}の町である。自らの中に無償の癒しの力を蔵する第 2 のセルニー^{セルニー}がルーシの地に現われた、神によってただ我が国民にだけでなく、すべての地に救いが与えられたのである。何故ならすべての国々からやって来て、人々が無償の癒しを得ているのである。恰も聖なる福音書の中で、主は聖なる使徒達に向って言われたのであった、『価なしに受けたれば、価なしに与えよ』と。主はまたこのような人々について言われたのであった、『我が為す業^{わざ}を信ずる者は、これよりも大なる業^{わざ}を為すべし』と。

しかしながら、おお、キリストの両殉教者よ、(かつて)現身^{うつしみ}の生を送られた父祖の地を忘れ給うな、常に訪れてこの地を見棄て給うな！そしてまた祈りの中で我等について常に祈り給え、禍いと苦しみが我等に及ばぬよう、あなた方とあなた方の僕^{しもべ}の身に及ばぬように。あなた方に恩寵が与えられて、あなた方は我等のために祈り給い、我等には神は我等について祈り、我等のために神に執り成し給う両聖者を与えられた。それ故に我等はあなた方に縋り、涙とともに跪いて祈願する、傲慢なる者の足が我等の上に及ばぬよう、罪ある者の手が我等を滅さぬよう、そしてあらゆる滅びが我等の上に到らぬように。飢えと不幸を我等から遠ざけ、すべて戦いの剣より我等を免れさせ給え、内訌を我等に無縁のものとし、あなた方に恃む我等をすべての罪業より庇い給え。我等の祈りを主なる神に致々として届け給え。我等はまことに多くの罪を犯し、幾度となく掟に背き、埒もなく乱行を尽したけれども、しかしあなた方の祈りに望みをかけつつ、我等は此処に救い主に向って呼ばれるのである――

主よ、罪なき唯一者よ！汝の聖なる天より憐れむべき我等を見給え、我等が罪を犯せしとき、汝は浄め給い、我等が掟に背きしとき、赦し給い、眼の欺きにつまづきしとき、妓女^{あそびめ}にせし如く我等を許し、収税吏^{みつきざり}にせし如く正し給えり。我等の上に汝の恩寵のあらんこと

1) この讃辞の中で言われている「異教徒」「傲慢なる者」等の表現は、主としてポーロヴェツを指すものであろう。

2) テサロニケ。聖ドミトリイ (St. Demetrius) は 7 世紀にその主教であり、やがて守護聖者とされた。

を、汝の慈愛の滴たらんことを、また我等をその罪によって付^{わた}さるる者となし給わず、苦^{にが}き死によって死なしめ給わず、我等を現世の悪より買い戻し、汝の前に我等の犯せし不正大なれば、主よ、懺悔の時を与え給え！我等の中に汝の名の唱えらるるに由り、主よ、恩寵もて我等と関わり給え。我等を憐れみ、慈しみ、汝のいと聖なる両殉教者の祈りによって我等を保証し給え。我等を侮りに曝し給わず、汝の恩寵を汝の牧場の羊等に灌ぎ給え、汝は我等の神にして、我等は汝に讚美を捧ぐるなれば、父と子と精霊に、今より絶えず、そして永遠^{とこしえ}に、永遠に。アーメン。